

熊野の
木林から



江戸時代の絵師、佐脇高之(さわき・すうし)が『百怪図巻』で描いた山うば。鬼女の代表として今に伝わるが、孤独老人への差別だったのかも知れない。(パブリックドメイン)

怪熊野

其の(十四) 「鬼女」



和歌山大学
システム工学部
環境システム学科
中島敦司教授

熊野の山中には、かつてさまざまな鬼女が暮らしていたという。これまでに、仙人(そまびと)を喰(く)らう龍神村のコサメ小女郎、二口で大飯を喰らう古座川の山姥(やまうば)のことを紹介したが、民俗学者の柳田國男も「熊野の山中において、白い姿をした女が野猪の群を追いかけて突然に出てくる」という

話を記している。先日、「昔話の主人公はなぜお爺さんとお婆さんばかりなのか」というコラムを読む機会があった。今昔物語集などの古文に書かれている内容から情報を抜き出し、当時の社会の姿を考察するというものであったが、説得力ある話の流れが面白く、一気読みしてしまった。それによると、古文に書かれた昔は、農山村では結婚できることが多かったという。仮に結婚できなくても、経済的な問題から子供を作ることにはもちろん、子育ても容易ではなかった。その結果、多くの人が独身か夫婦だけで壮年を迎え、それでも生きるため死ぬまで働き続けるを得なく、時には人里離れた朽ち果てた廃屋に住み、食べれるものなら何でも食べて生き延びた。その生活の凄(すさ)まじさは、人々に鬼の姿を想像させたことだろう。昔は、老人福祉の社会システムなどなかったのである。江戸時代の法として「生類憐れみの令」がある。犬などの動物への過剰愛護の悪法として、今に伝わっ



廃村となった山村に行くとき朽ちかけた廃屋を見かけるが、鬼女は廃屋で隠れて暮らしていた孤独老人だったのかも知れない。

ている。ところが、近年の歴史研究では、悪法ではなく、むしろ社会弱者保護の法であった可能性が指摘されるようになった。その昔は、児童虐待や人身売買、孤独老人への著しい差別が横行していたという。信じられない話であるが、飢饉(ききん)の時などでは人の死肉はもちろん、殺害してまでの人肉食が普通にあったことがさまざまな古資料に記録されている。「生類憐れみの令」は、社会弱者に対する「非道」を厳しく禁じた法であったという。

社会の発展に伴い、社会弱者への非道は徐々に減り、鬼女の話も聞かれなくなった。しかし、特に都会で耳にする老人の孤独死などの老人問題を上手に片付けられないことでは、昔も今も変わらない。現在でも、社会弱者は存在する。だが、虐待はもちろん、鬼女としてしまうような差別があってはならない。

中島敦司(なかしまあつし)教授プロフィール
昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。51歳。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗(妖怪、伝承)。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30〜50日は訪問し、研究する。

